

有機農業の導入検討（豊丘村）

■背景とねらい

国でみどりの食料システム戦略が策定されたことや、豊丘村近隣の市町村で有機農業の優良事例があることから、豊丘村での有機農業に対する関心が高まっている。その中で有機栽培米を学校給食で提供することを目標とする動きがあり、栽培意向のある農業者がいたため、有機農業への取り組みを支援した。

■本年度の取組と成果

1 農業委員会等での学習会

8、9月の農業委員会にて環境にやさしい農業や有機栽培に係る学習会を開催し、理解を深めるとともに、環境にやさしい農業への取組みに向けて意識を向上させることができた。また、水稻農家を対象にアイガモ農法を実践している農家へ視察研修を行ったことで、有機農業の難しさを実感し、環境にやさしい農業から始めていく方向へと変化してきた。

12月には認定農業者を対象に環境にやさしい農業に関する学習会を行い、緑肥や堆肥等を活用した減化学肥料に対する関心が高まった。

2 県認証取得米生育調査

本年度、県の環境にやさしい農産物認証を取得した水稻農家のほ場を試験ほ場とし、生育及び品質の実態調査を実施した。その結果を2月の農業委員会で共有することで県認証取得米の実情を理解してもらった。

■今後の課題と対応

来年度、県認証を取得した水稻農家において、高温耐性品種として近年導入推進されている「にじのきらめき」を試験栽培し、生育調査を実施することで、環境にやさしい農産物認証に則った栽培方法の適応性を検討する。

（地域第一係：細久保 安奈）

伝統野菜の採種技術の向上

■背景とねらい

信州の伝統野菜として、県内で83種類の品種が選定され、そのうち3分の1に相当する28品種が南信州地域にある。（令和6年1月末現在）

県では主要農作物及び伝統野菜等の種子に関する条例を令和2年4月に制定し、品種や採種技術といった無形資産の確実な継承、種子の安定的な保存につなげていくことを目的に、採種技術の継承を支援している。

栽培者自らが採種の特性を十分に理解して、伝承地において採種技術を継承する仕組みを整えていくことを目的に採種指導会を開催した。

■本年度の取組と成果

自家不和合性や近交弱勢といった特性のあるアブラナ科野菜について、種子の安定生産に向けた現状や課題を共有し、形質安定に向けた採種の考え方について理解を深め、採種技術の向上を図るとともに、種子を継承していく仕組みについて、信州伝統野菜認定委員会座長と長野県野菜花き試験場育種部研究員を講師に検討した。

また、下條村の「親田辛味大根」と阿智村の「赤根大根」の採種の現状と課題について、生産者と当センター地域担当者が説明した。

この指導会を通じて、採種の現状と課題について、生産組織や関係者が共有することができた。

■今後の課題と対応

この2品種では長年F1採種を業者委託してきたが、契約が解消したため、今後は自家採種をする必要がある。生産組織には自家採種により種子の維持を継続してきた者がそれぞれいる。組織としての採種技術の継承および実需者のニーズに応えられるよう形質の確認を毎年行う仕組みづくりを支援していく。

（技術経営係：宮澤 雅子）

下栗芋の安定的生産の取組（飯田市）

■背景とねらい

下栗芋は、アブラムシ類が媒介するウイルス感染により収量低下が課題となっている。

そこで、安定生産のためのワクチン接種効果確認試験を、野菜花き試験場の協力のもとに行った。

■本年度の取組と成果

1 ワクチン接種株を用いた現地試験

上村下栗のほ場において、試験的に作られたワクチンを塗布した種芋を4月に定植し、その後状況確認を行った。本年度は、6月の豪雨後に地上部に一部枯れが見られるほ場もあったが、ワクチンを接種したほ場では見られなかった。

最終的なウイルス検査の結果、ワクチン接種した株でも30%程度の感染がみられ、ワクチンの有効性はあまり高くないことが確認された。



一部枯死した株の調査する試験

2 健全な種芋生産の啓発

健全な種芋を生産する労力が課題で、全体の種芋生産は行わなかったが、3月9日には里の会の全生産者を集めて栽培講習会を開催し、健全株の茎葉処理やアブラムシ防除について指導した。

■今後の課題と対応

ウイルス感染を防ぐため、茎葉処理やアブラムシ防除を啓発していたが、高齢化により傾斜地での作業が困難となっているため、現状に即した防除の検討が必要である。

（地域第二係：深谷 俊英）

千代ネギの生産振興（飯田市）

■背景とねらい

「千代ネギ」は、飯田市千代地区で信州の伝統野菜伝承地栽培認定を受けている。生産者団体「千代ネギの会」では採種と生産・販売を行っているが、生産者のほとんどが自家消費のみであり、販売量が少なく知名度も低いことが課題である。令和5年度は、加工品の生産や商談会への参加等を行い、販路確保・生産安定にむけ活動した。

■本年度の取組と成果

1 栽培指導

モデルほ場を設置し、会員の共同作業で育苗から収穫までの一連の作業を行った。また、昨年度は苗の生育が悪く定植時期に間に合わなかったことから、育苗期間中にこまめに巡回を行った。そのため、本年度は株分け苗だけでなく育苗した苗の定植を行うことができた。



モデルほ場での作業のようす

2 地域内での知名度向上に向けた取組

南信州うまいもの商談会への出展や、地元飲食店との取引による販路拡大に取り組んだ。また、知名度向上のため、天竜峡マルシェなど多くのイベントへの出展や、加工業者に委託して製造したネギダレの販売に取り組んだ。

■今後の課題と対応

本年度も販路拡大・知名度向上に向けた取組みを積極的に行ったが、会員の高齢化や会員数の減少により産地の維持・販売が難しくなっているという課題がある。栽培に係る組織体制を改善し、個人の負担を減らすことで生産安定につなげたい。

（地域第二係：内田 牧歩）

御所ねぎの生産振興（阿智村）

■背景とねらい

阿智村浪合地区に古くから伝わる「御所ねぎ」は令和5年度に「信州の伝統野菜」として選定された。これを契機に地元昼神温泉でも使用されるようになり、更なる生産拡大が望まれている。

「御所ねぎ」は、長さ70～80cm程度の分けつ性のねぎであり、分けつ数は2～3本、太さは2cm程度である。軟白部は柔らかく、甘みが強いのが特徴であり、辛味はやや弱い。

■本年度の取組と成果

令和3年度に申請していた伝統野菜の種子保存事業に採択されたため種子を原種センターに送付する手続き等の支援をした。また、伝統野菜のパンフレットがリニューアルされる際の内容について現地と検討した。そして本年の採種状況について確認した。本年は種子生産以外にも約30aで生産された。



出荷用の御所ねぎほ場

■今後の課題と対応

本年は干ばつの影響もあり出荷規格のM・Sに相当するものが多いことが課題となった。次年度は株間を変更するため連結ポットのサイズを見直すなど肥培管理も検討して、秀2Lの等級を増やすよう改善していきたい。

(地域第三係：中村 武郎)

ていざなすの生産振興（天龍村）

■背景とねらい

信州の伝統野菜の「ていざなす」で令和2年にはナス青枯病、令和3年にはフザリウム属菌、令和4年にはナス半身萎凋病によると考えられる萎凋症状が一部で発生した。

そこで土壌病害に対応する栽培方法を提案するとともに、モデルほ場を設置してその実証に取り組んだ。

■本年度の取組と成果

1 実証に取り組んだ土壌病害対策

- (1) エンジン付きオーガを用いた2mごとの排水穴の設置による排水対策
- (2) 耐病性台木（トナシム等）の高接ぎ木栽培
- (3) 白マルチ、竹チップやキノコ廃培地を利用したマルチによる地温上昇抑制対策

2 本年の発病状況

萎凋症状が8月下旬から出始めて、次第に拡大していった。一部ほ場では、ナス半身萎凋病のほかナス青枯病と考えられる症状も見られた。



11月13日のほ場（発病状況）

■今後の課題と対応

ほ場によっては複数の土壌病害が発生している可能性もあるので、本年度取り組んだ対策に加えて、土壌病害対策に共通する優良有機物の施用や高畝成型機の導入等による排水対策などに取り組みたい。

(阿南支所：西嶋 秀雄)

源助蕪菜の生産振興（泰阜村）

■背景とねらい

源助蕪菜は、信州の伝統野菜の伝承地栽培認定を受けており、村の振興品目の一つになっている。野沢菜に比べて収量が少なく、十分な寒さにあててからの収穫になるが、それまでに漬物出荷規格に適合する生育を確保する必要がある。しかし、播種時期の見極めが難しく、生産量が増えていないことが課題の一つである。

■本年度の取組と成果

1 pH、EC測定による、適正施肥の推進

泰阜村役場と連携し、播種前に作付予定の全ほ場を巡回し、pHとECを測定し、元肥の目安を示した。農家からは、参考になったという反応が得られた。

2 生産安定に向けたほ場試験の実施

役場と連携し、播種日、肥料の有無、マルチの有無によるモデル試験ほ場を設置した。本年度の試験結果からは、播種日が9月中下旬であっても、施肥とマルチを行えば出荷規格



試験ほ場の様子

に達するまでの生育が確保できることが分かった。

3 収穫体験イベントの開催支援

12月2日に開催された伝承地における「収穫体験イベント」の企画運営を支援した。漬物シーズン真っ最中で収穫した希少な蕪菜の一部を持ち帰れることもあり、参加者からは好評であった。

■今後の課題と対応

収穫適期がその年の気象に左右され、播種時期の見極めが難しいが、生産安定に向けて今後も試験を行いながら検討していく。また、採種農家の後継者育成も課題であり、関係機関と連携して支援を行う。

（阿南支所：岡田 孝章）

志げ子なすの生産振興（喬木村）

■背景とねらい

「志げ子なす」は、平成27年度に信州の伝統野菜に選定された大型のなすで、令和4年度には伝承地栽培認定を受けている。本年度は、農家の栽培管理技術の向上を図る栽培指導会と、販路拡大や消費拡大のための食味分析を実施した。

■本年度の取組と成果

1 栽培指導会の実施

喬木村役場担当者と連携し、5月17日に苗の配布に併せて栽培指導会を実施した。生産者8名が参加し、基本的な栽培技術について講習を行った。

2 食味分析の実施

志げ子なすの食材としての特徴を化学的に分析、評価する取組（食味分析）を（公財）南信州・飯田産業センターと連携し、9月14日に実施した。

食味分析では、志げ子なすの大きさによって食味・食感が異なるという意見が農家から挙がっていたため、大きさ及び調理方法ごとに比較を行った。食味分析の結果、大きさの違いは食味に影響せず、部位による違いが食味に影響することが示唆された。



レオメーターを用いて「食感」を計測する様子

■今後の課題と対応

今年は暑熱や降水量の影響で、生育の停滞や収量の減少があり、病害の発生が園地によってみられた。気象変動に対応できる栽培管理を検討する。

また、食味分析の結果を知名度向上や販路拡大に活用していく。

（地域第一係：西川 侑宏）

茶の品質向上に向けた取組

■背景とねらい

管内の茶は長年、担い手不足と高齢化により適期作業が困難となり、品質低下を招いている。

そこで、長野県茶振興協議会と連携し、講習会を通じた適期作業や防除時期を周知し、基本技術の徹底を図った。

■本年度の取組と成果

1 講習会の開催

3月上旬中に春整枝講習会、4月中旬に適期摘採講習会、6月上旬に夏季管理講習会を飯田市、阿南町、下條村、天龍村、泰阜村の計12会場にて開催した。



品質向上のための更新せん定指導

2 チャ炭疽病の防除時期の把握

飯田市南信濃にて、6月の夏季整枝後に、萌芽期～開葉1枚期、開葉2～3枚期、開葉4枚期以降に薬剤を散布し、生育ステージ別の防除による炭疽病発病葉数を調査したところ、生育ステージの違いによる発病の差は認められなかった。また、無散布区と散布区の発病芽数にも差がなく、炭疽病防除の難しさが明らかとなった。

■今後の課題と対応

自家用利用が多く、品質よりも量を確保したい農家が多いため、求められる品質に見合った生産量の確保ができない。引き続き適期作業を周知し、品質向上に向け支援する。

なお、本取組は中山間地農業ルネッサンス推進事業を活用している。

(地域第二係：深谷 俊英)

遊休農地の活用支援（泰阜村）

■背景とねらい

泰阜村では、農業の担い手不足や高齢化により遊休農地が増加している。村では、そのような遊休農地について農地中間管理機構を通じた担い手への集積を目指している。

そこでこれら遊休農地の有効活用を図るため、役場と連携し、土壌断面調査と排水性調査を通じたほ場の特性把握を行った。

■本年度の取組と成果

1 土壌調査対象ほ場の選定

5月18日に、間もなく返還期限を迎え遊休化の懸念のある50余のほ場のうち、立地条件などを考慮し、維持管理が必要と考えられるほ場の中から土壌調査を行う2ほ場を選定した。

2 土壌断面及び排水性調査

12月6日に、選定したほ場のうち1つのほ場について土壌断面の調査と透水性の調査を実施した。

断面調査の結果、作土層は15cmほどの埴壤土であった。直径2～5cm程度の礫が散見され、まれに10cmを超える礫も見られた。礫は特に地表15cm以下に多く、ロータリーも入りにくいと推察された。根域は30cmほどであった。また、35cm以下には大小さまざまな堆積岩が分布していた。

透水性調査は2か所で行い、いずれも、やや不良の判断となった。



土壌断面調査

■今後の課題と対応

地域計画の策定や推進において、今回の土壌調査結果も踏まえて、将来にわたって維持管理すべき農地の選定に生かしていく。あわせて作付作物の選定や排水対策等の支援を行っていく。

(阿南支所：岡田 孝章)

地域計画策定に向けた支援

■背景とねらい

地域計画の策定は、令和4年5月に農業経営基盤強化促進法が改正され義務付けられた。令和6年度末までに、すべての市町村で、10年後の地域農業のあり方と目標地図を含めた計画を作成しなければならない。

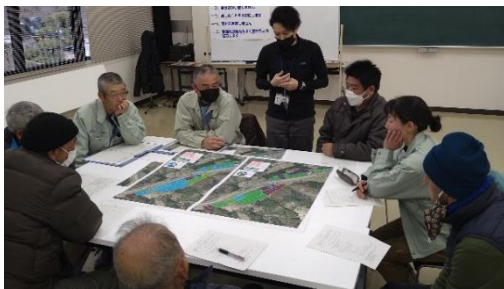
市町村、農業委員会が中心となり進められるが関係機関の連携が重要である。当支援センターでも工程表に基づき期限内の計画策定が完了するよう県支援チームによる支援を行っている。

■本年度の取組と成果

1 地域計画策定に向けた支援

(1) 地域懇談会参加による合意形成支援

実施地区の説明会や懇談会へ参加し、必要に応じて資料の提供や、ワークショップの補助等を実施。参加を通して地域の状況把握や地域計画策定上の課題の共有ができた。



大鹿村鹿塩地区の意見交換会の様子

(2) 地域計画策定に向けヒアリングの実施

地域計画の策定にあたり、毎月各市町村の進め方や課題、支援の要望等支援チーム担当で聞き取りを行っている。各市町村でそれぞれの進め方があり、課題も様々であるがそれぞれ具体的な取り組みが始まった。

■今後の課題と対応

今後、工程表に基づいて計画策定が進むよう市町村等と協力して取り組む。また、引き続き地域の懇談会に参加するとともに、必要に応じ、他地域の情報提供や研修会講師の派遣等支援を行っていく。

(地域第一係：木下 倫信)

農地の遊休化防止に対する支援 (根羽村)

■背景とねらい

根羽村では面積の大半を森林が占め、数少ない農地も遊休化が進んでいる。そこで、根羽村では青年農業者の規模拡大や気候条件に適する品目の検討を行うことで、農地の遊休化防止を図っている。支援センターとして、遊休農地解消を目的とする村内の農事組合法人との意見交換会および村内の青年農業者・新規就農者の巡回指導を行った。

■本年度の取組と成果

1 農事組合法人との意見交換会

村内の遊休農地解消を目的とした農事組合法人と4月17日に意見交換会を行った。主な議題は鳥獣害対策、ソバの栽培、新たな品目の導入等。特にソバの栽培に関しては、生産振興のために新品種の導入を行いたいとの相談があり、桔梗13号の試験栽培を提案した。しかし、他の作業との兼ね合いもあり、本年度の導入は見送られた。

2 青年農業者・新規就農者の巡回指導

村内の青年農業者(2名)、新規就農者(1名)に月1回程度巡回指導を行った。中玉トマトを栽培する青年農業者K氏は規模拡大と法人化に関する打ち合わせの中で、補助事業の紹介とともに1月25日に開催された南信州地域経営相談会への参加を誘導し、経営に関する知識向上に役立ててもらった。

■今後の課題と対応

高齢化による遊休農地の増加が避けられない中、意欲的な青年農業者への農地の集約がより一層求められる。併せて、村の気候に適した品目の導入が必要となる。今後も栽培の巡回指導、新品目の導入支援を通じ、農地の遊休化防止のための活動を継続する。

(地域第三係：浅見 茉由子)

鳥獣害対策資材の実証展示

■背景とねらい

管内の鳥獣害は減少傾向にあるが、依然として6,300千円程度（令和4年）の被害が発生している。

広域柵の設置等により、シカ・イノシシによる被害は減少傾向であるが、シャインマスカットをはじめとするぶどうやももなどの果樹栽培面積拡大に伴い、ハクビシンを中心とした中型獣による被害が増えつつある。

■本年度の取組と成果

本年度はサルおよび中型獣対策として長野式電気柵の展示を飯田市と平谷村で、中型獣対策として「楽落くん」の実証展示を飯田市と喬木村で、同じく中型獣対策として「かたまったくん」の実証展示を飯田市と平谷村で行った。

また、喬木村のぶどう園では、ハクビシン対策としての電気柵に加えて、柵線を伝っての侵入を防止するため、柵線にペットボトルを加工して設置したところ侵入を防止することができた。



もも園地におけるハクビシン対策

■今後の課題と対応

当管内で栽培面積が増加しているぶどう・ももの中型獣対策の実証展示に加えて、トウモロコシなどに対するカラス対策の実証展示を増やしていく。また、既存の電気柵のメンテナンスや、深刻化しているシカによる果樹の苗木の食害対策にも取り組んでいきたい。

本取組は中山間地農業ルネッサンス推進事業を活用している。

（地域第二係：深谷 俊英）

鳥獣害対策資材の設置講習会 （平谷村）

■背景とねらい

平谷村では夏季の冷涼な気候条件を活かし、スイートコーンの栽培を推進している。村内の直売所に出荷する生産者組合員を中心に栽培が行われ、平谷村の特産品の1つとして認知されている一方、鳥獣害による被害が多数確認され、収穫量の減少や品質低下を招いている。

そこで、電気柵の設置講習会および実証展示を行い、鳥獣害対策への意識向上および鳥獣による食害の低減を図った。

■本年度の取組と成果

ハクビシンをはじめとする中小動物の侵入防止に効果的とされている電気柵の設置講習会を7月7日に開催した。当日は平谷村民を中心に約20名の参加があり、設置を体験した。電気柵設置によりスイートコーンの食害は大きく減少した一方で、少数ながらほ場内でハクビシンの食害痕が見られた。そのため、暗視カメラを設置したが、侵入経路の特定はできなかった。

11月29日に行われた平谷村農業等生産者組合通常総会にて、設置した電気柵の説明ならびに結果の報告を行った。



設置講習会の様子

■今後の課題と対応

電気柵の有効性を知ってもらう一助として、今後も支援を続けていく。

本取組は中山間地農業ルネッサンス推進事業を活用している。

（地域第三係：浅見 茉由子）